

# 貧困層を支えるドサンコラ 「寄付国家」カンボジアの断章

萩本 和之

戦禍による貧困国家の一つ、カンボジアへ二〇一

五年八月九日午後、新千歳空港を出発して六泊七日を訪れた。訪問のきっかけはたまたま本年四月からカンボジアの子供の就学支援などを行っている「アナコット」カンボジア（田中千草代表 写真の「里親」となったため、「里子」に会いに行くためだ。「カンボジアは国家予算の赤字分を外国からの援助で穴埋めしている」といわれるほどの被援助国。今回の訪問では第二の都市、シャムリアップ市で「アナコット」の活動などを見聞したが、貧困で苦しむ庶民を善意や寄付で支える日本人に出会った。そのごく一端を紹介する。



## 戦禍に伴い、貧困国家に

カンボジアは「独立の父」と敬愛されているシアンク殿下の子息、シハモニ国王を君主とする立憲制。ベトナム派といわれるフン・セン（人民党）氏が首相。二〇一三年の国民会議選挙で与党

が辛勝している。クメール人が九〇%を占める。

古来、ベトナムやタイとの間で戦争が絶えず支配、被支配の関係だったが、フランス領となり、その後日本の植民地ともなった。第二次大戦後も戦禍が絶えず、極端な共産主義を掲げるクメール・ルーージュのポル・ポト派政権は、米国やベトナムなどへの反発として誕生している。

しかし、ベトナム軍が侵攻して、そのバックアップで現政府が樹立したものの、ポル・ポト派がいわゆる教員ら知識人らを含めて大量虐殺したために、いまだに社会全体にそのひずみが残っている。一九九二年には初の自衛隊PKOが停戦監視要員として出動している。

## 国家予算の25%以上を外国に依存

二〇一五年の国家予算のうち、歳入内訳は、税収入二四億ドル（約二八八〇億円）、一米ドル一〇〇円で換算、以下同）、税外収入三億六六〇〇万ドル（約四四〇億円）として、外国からの贈与一億三四〇〇万ドル（約一六一億円）、外国から

の借款八億ドル（約九六〇億円）等を見込んでおり、二五%以上を外国に依存している。これに関連して、対外借入枠も八億八八〇〇万ドル（約一〇六六億円）要求している。実際、国道など主要インフラの建設経費は日本などのODAで賄われたほか、シエムリアップ市の交通信号なども国内外からの「寄付」で設置されているありさまだ。

## 賄賂が横行、庶民は節税が当たり前

公務員の給与も低く、月二〇〇ドル（二万四千元）〜四〇〇ドル（四万八千元）で、最低でも三〇〇ドル（三万六千元）必要といわれる中、例えば警察官は交通違反者から取った違反金は自分の「収入」とするなど公然と賄賂が横行している。実際、筆者が入国の際、勘違いして三〇ドル（三六〇〇円）のビザ発給料金を三〇〇ドル（三万六千元）支払ったが、お金を数えることなく、知らん顔をして、そのまま受け取ってしまった。

また教育委員会は市街地から離れた場所に二年前に新築されたものの、職員らは「現行給与では郊外まで通えない」と「通勤拒否」を実行しているため、新庁舎は未利用で、学校校舎などを活用して分散行政で対応しているそうだ。

一方、たまたま知り合ったレストラン主は「月額一二〇ドル（二万四四〇〇円）を超えると高い所得税を払わないといけないので、かえって手取りが減

るから、従業員への給与の額面は一〇〇ドル（二万二千円）ぐらいに抑えて、残りは裏支給をしている」と話すなど庶民の間では納税意識はかなり希薄だ。

## 副業なしで生活できない教員

カンボジアの教育制度は日本と同じ六・三義務教育制。教員はシエムリアップで月四〇ドル（四八〇〇円）〜六〇ドル（七二〇〇円）前後と極端に低く、全員が副業をしている。タクシーの運転手やマッサージ師など職業もさまざまだが、小学校は午前、午後の二部制の交代勤務なので、ほとんどの教員は空き教室などを使つての私塾を開き、アルバイトとして自分の担当児童の教育をしている。このため、塾の代金を支払えない貧困層の子供は正規の授業についていけないことや、通学さえ断念する子も現れ、この国でも教育に伴う「貧困の負の連鎖」となっている。

## 2000人弱の子供が「里子」に

こうした中で、「貧困の負の連鎖」を少しでも断とうと、田中代表（三七）が就学教育支援団体「アナコット（クメール語で『未来』）里親会」を二〇一〇年に設立した。芦別市や赤平市の小、中学校で教員を経験した田中さんは、二〇〇七年から二年間国際協力機構（JICA）青年海外協力隊としてシエムリアップ市内のカンボジア一のマンモ



経済的なハンディを乗り越えて勉学へ目を輝かすカンボジアの児童たち。学習ぶりを見学する「アナコット里親」のメンバー（筆者撮影）

ス校、ワット・ポー小学校で音楽などを教えたのがきっかけ。任期終了後いったん帰国したものの、現地住民らの要望を受けて再び同校へ戻り、校長補佐として器楽合奏を指導する傍ら、ボランティア団体「アナコット」を通じて、貧困家庭の経済的な支援や就学協力に取り組んでいる。現在「アナコット」の主要メンバーは八人。就学支援はユニークな里親制度で、日本人の「里親」がシヤムリアップ市の「里子」に毎年二〇〇ドル（二万八千円）を贈るもの。日本各地の「里親」からの支援で小、中学生計一七二人が元気に明るく学校へ通っている。

今年一月からは高校へ進学する「里子」も誕生する。五年前から「里親」となった茨城県つくば市の夫婦は中学三年生の長男と一緒に訪れ、八月一日に同学年の「里子」と感激の再会を果たし、「高校へ行っても支援をするので、頑張つて」と「里子」を激励していた。

## 親たちの経済的自立のために

一方、就学を維持するためには、親が経済的な貧困から脱出することが大事と、「アナコット」は「里子」の親たちに縫製を教え、その製品を日本で販売することを昨年から本格的に進めている。田中さんが滝川高校出身なので滝川市などが全面的に協力している。この縫製の技術支援には滝川消費者協会が応援して、いまでは十数人が上手にゾウのぬいぐるみや、布袋などを作っている。「働く喜びを感じるし、経済的に潤っている」と作業をしている母親たちも自立への自信を深め、販売利益をもとに、共同でバイクを購入するなどお互いを支え合うようになっている。

出来上がった縫製品の販売は芦別の道の駅「スタープラザ芦別」などのほか、イベントへの出店も行っている。九月四日から三日間行われたHIT B「イチオシ！まつり」には滝川市国際課職員の方の全面協力で出店。ゾウのぬいぐるみは「かわいい」と飛ぶように売れていた。

貧困家庭の病人などにも手を差し伸べている田

中さんは「私一人の力は小さいもので、一緒に取り組んでくれる現地の仲間と、そして日本、特に滝川や芦別を中心として支えてくださる温かな応援で、少しずつ前に進んでいるところで」と話す。

また日本財団の支援で新たに共同住宅ができた。約四〇〇平方メートルの敷地に立つ三階建て一部四階。オフィススペースのほか個室も一〇室用意、借金取りに追われる家族や夫のDVから逃れる妻子、身寄りのない子供らの避難場所、さらに学習支援、職業訓練、生活拠点として活用する。将来は野菜など食材の自給も目指す。

### 美術教育や小児病院の運営も

カンボジアの教育カリキュラムには音楽や美術がほとんど位置づけられていない。このため、「自己表現が苦手な子が多い」という。田中代表は音楽面での教育の指導を行っているが、美術の面で熱心に奉仕をしている。元東京都立高校教員に出会った。「小さな美術スクール」を主宰する笠原知子さんと、二〇〇八年からシエムリアップ市内に住み、孤児院や学校などへ出前授業や学校訪問を行っている。絵を描くことで豊かな表現する喜びを、と自宅を美術教室兼アトリエとして開放している。

また「アンコール小児病院」は古代遺跡郡撮影のためにアンコール遺跡群に旅を重ねていたカメラマン井津建郎さんⅡ在米国Ⅱが世界中に呼びかけて結成した非営利団体フレンズ・ウィズアウト・

ソウのぬいぐるみを製作して、自立をめざすカンボジアの主婦たち。手前に製作した人気のぬいぐるみのソウ（筆者撮影）



ア・ボーダー（国境なき友人）が一九九九年シエムリアップに開院した。

無料診療ということもあって、周辺農村部からも子供を抱えて受診に訪れているが、入院費などは無料ながら、食事は自分たちで賄うために、地方からの親は泊まり込みで毎食入院している子供へ届ける。食事時間には病院前は食事を持参した親たちでこった返している。親たちは自分の宿泊費などもかかるために、貧困家庭にとつては経済的には厳しいそうだ。

このほか、カンボジアで活動している人の中で、有名なのはオリンピックピクマラソン銀メダリスト、有森裕子さん。有森さんはNGO「ハート・オブ・ゴールド」を結成して、スポーツ普及やマラソン大会などを通じて支援している。またフォトジャーナリスト安田菜津紀さんが高校生らを対象にカンボジア・スタディツアーなどを行っている。

### おわりに

カンボジアの最近の経済成長は六〜七%前後の伸びで、貧困率は二〇〇四年の五三%から、二〇一三年には一六%まで向上した、と現政府は対外発表をしているものの、隣国タイへの出稼ぎも多く現地では「あまり改善されていない」という声根強い。

シエムリアップではアンコール・ワットの観光客目当てで、いまベトナムなどの海外資本が高級ホテルやゲストハウスを次々と建設して、活況を呈している。しかし、郊外にはまだ数多くの地雷が残っており、依然戦禍が癒えていない。中心部を流れるシエムリアップ川沿いにあつた貧民街は強制的に撤去されて郊外へ追い払ったり、強権的に道路拡張をして経済的な補償がほとんどなく、住宅を失った人たちなど経済格差が顕著になっている。

日本ではマイナンバー制度で税金は「国民総捕捉国家」へばく進しているが、一方カンボジアは「寄付」をベースにインフラを整備している。両国の在り方は、ある種極端ながら聞かれるのが「政府は何をしているの?」「税金の使い方は?」との声だ。上座部仏教の国なので、カンボジア人は「寄付は功德を積む」という意識があるものの、現政府の腐敗やベトナムとの結びつきなどへの不満はかなりのまっついている、と感じた。

へはぎもと かずゆき・北海道武蔵女子短大非常勤講師